を具するものにして、既に大聖の境に達したる人なるべし、今此語の原形を知らず。

○字傍に點を付したるは、本文中に引用せるもの、若くは從來摩尼教に關して知られたる事柄と對比すべき要項と思惟せるものなり。

以上は殘經中の一節の抄出にすぎざれども、之によりて新たに此宗教に就いて知り得べき所決して少々に非るべし。

三　經中に見ゆる特種の語に就いて

余輩は茲に此經中に見え、且つ從來摩尼教に關する學者の論議中に屢々討究せられし特種の語を摘出して三個を得たり、則ち一、二宗義、二、慕闍、三、拂多誕是れなり、今少しく此等の語に就いて論述する所あるべし。

前掲經中(ハ)に、「信二宗義、心淨無疑、棄暗從明、如聖所說」、と云ひ又た殘經七枚左に五種の無上淸淨光明寶樹中の意樹なるものを說きて、「(其樹)莖是了二宗義」と云へり、抑も二宗なる文字が支那に行はれし宗教に關して用ゐられたるは、佛祖統記の記事第三十九、第五十四、を以て最も古しとすべし、即ち「波斯國人拂多誕西海大秦國人持二宗經僞教來朝」と記し、以て武后延載元年の事なりとす、而して良渚之に註して、「二宗者、謂男女不嫁娶、互持不語、病不服藥　死則裸葬等云々」と云へり。されど此註記によりては、何が故に拂多誕の齎らしし宗教を二宗教といふやは明らかならざるなり。されば碩學シャヴンヌ氏の如きも、此文字を譯して deux vénérables と云ひ、また deux ancêtres とも解し得べしと說けり、(Chavannes : Le nestorianisme et l'inscription de Karaba-Balgassoun. Journal